

読むことに向き合い一人一人が学びを深める国語科学習指導

—言葉による見方・考え方を働かせ、考えを形成し、共有する単元の構想と展開—

美馬市立脇町小学校教諭 村岡 さお美

1 はじめに

第3学年の児童37名は、読書が好きである。多くの児童が図書室に通っており、本を読もうとする意欲が高い。しかし、同じシリーズの本を読んだり、色々な種類の図鑑を見たりと、読む本の内容に偏りが見られる。そこで、図書室に自分がおすすめする本の読書カードを置き、その本のよさを全校児童に伝えることを通して、じっくりと一冊の本を読み込み、読書の幅を広げてほしいと考え、本実践を行うこととした。

2 研究の方向

- (1) 国語科学習と読書活動（本を読む・本の紹介を書く）を螺旋的に展開することができるよう、年間計画を作成する。それぞれの単元で、一人一人の学びに応じた言語活動をすすめる。
- (2) 国語科学習での学びを自らの読書カード作成に生かし、「読む力」「書く力」を育む。
- (3) 国語科学習において、感想を共有し合う場を工夫する。読書活動においても、本を読んだ感想を共有する場を設定し、お互いの考えを広げる。

3 研究の実際

物語教材を扱う単元（1）～（4）を設定し、各単元において①～④の活動を行う。

- (1) 単元「あらすじを書こう」（「はりねずみと金貨」／東京書籍3上）

① 単元の目標を設定し、物語教材を学習する。
② 単元で学んだことを生かした「物語教材」の読書カードを書く。
③ 単元で学んだことを生かした「わたしのおすすめの本」の読書カードを書く。
④ 教室や図書室で、読書カードを共有する。（以下次単元からも同様）
- (2) 単元「中心人物がどのような人物かを考えよう」（「サーカスのライオン」／東京書籍3上）
- (3) 単元「どのような人物かを想像しながら読もう」（「モチモチの木」／東京書籍3下）
- (4) 単元「物語のしかけをさがそう」（「ゆうすげ村の小さな旅館」／東京書籍3下）

4 おわりに

紹介した本を誰かが読んでくれるという活動は、児童の「本を読むこと」「読書カードを書くこと」の意欲を高めることに効果的であった。読む楽しさや伝える面白さを「共有する」ことで、「全校児童に読書の幅を広げてもらうためにはどうすればよいか」と考え始めた。このことが、児童自身の主体的に学ぶ意欲を喚起させ、自らの「読む」「書く」活動を展開することにつながった。

今後の課題として、物語教材で学習した読み方を継続して日常の読書に取り入れ、魅力的な読書カードを作成し、本を紹介することができるよう、個に応じた指導を模索していきたい。